

A 語句の意味と読み

(1) やくなし／つまらない・困ったことだ / 命じられた兄二人の内心。「益（やく）＝ためになること」がない、の意

(2) しるし（「しょう」と読む教科書もあるので、お使いの教科書の読みに合わせる） / この一言があるからこそ、道長は小刀を借りて柱を削ってくる

(3) （恐ろしさを）我慢して・こらえて / 「念ず」は「祈る」だけでなく「我慢する」の意が頻出。ここは後者

(4) ぶるぶる震えながら / 同じ動詞を重ねて「～しながら」。栗田殿の恐怖を表す

(5) 平然と・何事もなかったかのように / ×「冷たく」。恐れた様子がまったくない道長の態度

(6) 驚きあきれるほどで（ここは非難の意味ではなく、道長の豪胆さに対する驚嘆） / 古語の「あさまし」は善悪に関係なく「驚きあきれる」。「みっともない」ではない

B 文法

(7) 過去推量（～たのだろう）の助動詞「けむ」の連体形。上の係助詞「や」を受けた結び。 / 連体形は終止形と同じ形。「お思いになったのだろうか」と訳す

(8) 断定の助動詞「なり」の連体形「なる」が撥音便「なん」となり、その「ん」が表記されない形「な」＋推定の助動詞「めり」の已然形「めれ」。上の係助詞「こそ」の結びなので已然形になっている。 / 「なめれ」→「なんめれ」→「なるめれ」と戻して考えるのが手順

(9) 「往な」＝ナ行変格活用動詞「往ぬ」の未然形。「む」＝推量（可能推量）の助動詞「む」の終止形。 / 「な＋む」を強意の「なむ」と取り違えないこと。⑥と見くらべる

(10) 打消推量（打消意志とする説もある）の助動詞「じ」の終止形。 / 文末なので終止形。「じ」は活用の形が変わらない語。呼び名はお使いの教科書の説明に合わせる

(11) 強意（確述）の助動詞「ぬ」の未然形「な」＋意志の助動詞「む」の終止形。「きっと参りましょう」の意。 / 連用形「まかり」に付いているのが決め手。願望の終助詞「なむ」・係助詞「なむ」との識別が頻出

(12) 推量（ここでは可能・意志をふくむ推量）の助動詞「む」の已然形。係助詞「こそ」を受けた係り結び。 / 「こそ」

→已然形。上の「ば」は未然形＋「ば」で仮定条件

C 主語・敬意の方向

(13) 「思ふ」の尊敬語。語り手（作者）から帝（花山院）への敬意。 / 尊敬語は動作をする人を高める。地の文なので敬意の出どころは語り手

(14) 尊敬の助動詞「さす」の連用形「させ」＋尊敬の補助動詞「おはします」。尊敬語を二つ重ねた二重尊敬（最高敬語）である。動作の主は帝（花山院）。 / 直前に「帝、さうざうしとや思しめしけむ」と主語が置かれている。なお『大鏡』では語り手が道長も特別に高め、道長にも最高敬語（見えさせ給はぬ・参らせ給へる・奉らせ給ふ）を使うので、「最高敬語だから主語は帝」とは決めつけないこと

(15) 「申し」＝謙譲語で、動作を受ける帝への敬意。「給ひ」＝尊敬語で、動作主である入道殿（道長）への敬意。どちらも語り手からの敬意である。 / 一語の中に二方向。謙譲＝受け手を、尊敬＝動作主を高める

(16) 花山院（帝）の言葉。一人で大極殿まで行ってきたことを示す証拠を持ち帰るよう求めている。 / この念押しに道長が「げに。」と応じ、小刀を借りる流れになる

(17) 入道殿（藤原道長） / 直前の「入道殿は」が主語。恐れをあらわにした兄二人と対比されている

D 口語訳

(18) （そのような所に）一人で行けるだろうか、いや、行けまい。 ※文末の「や」を反語の係助詞とするか終助詞とするかは教科書によって異なるので、お使いの教科書の説明に合わせる。 / 反語。人々をけしかける帝の言葉

(19) とても参ることはできますまい。 / 「え～じ」＝不可能。しりごみした人々の言葉

(20) 命がございましてこそ、ご命令もお受けできましよう（命がなくてはお命令もお受けできません）。 / 命あってのこと、という栗田殿の言いわけ

(21) 手ぶらで帰参いたしましたのでは、（行った）証拠がございませんでしょうから、高御座の南面の柱の根もとを削って参ったのでございます。 / 「ただにて」＝何も持たずに。「候ふまじき」＝丁寧語＋打消推量

E 内容・記述

(22) 宴の松原のあたりで、正体のわからない声々が聞こえてきて、どうしようもなくなったから。／「術なくて帰り給ふ」が根拠。恐ろしさをこらえて進んでいたことが「念じて」に出ている

(23) 仁寿殿の東側の砌のあたりに、軒と同じ高さの人がいるように見え、正気を失ってしまったから。／「ものもおぼえで」＝何が何だかわからなくなって・正気を失って。二人にだけ恐怖を表す語がついている

(24) 中関白殿の「念じて」「術なくて帰り給ふ」、粟田殿の「わななくわななく」「ものもおぼえで」という恐怖の様子と対比され、道長だけが少しも恐れず平然としていることが強調されている。／恐ろしさを表す語が兄二人にだけ付き、道長にはまったく付かない

(25) 持ち帰ったのは、大極殿の高御座の南面の柱の根もとを削り取った削り屑。帝は翌朝、蔵人に命じてその削り屑を柱まで持って行かせ、削り跡に押しつけさせたところ、少しも食い違わなかった。／最後の「つゆ違はざりけり」で、道長の言葉が本当だと証明される

F 文学史

(26) 平安時代後期の成立とされる、歴史物語。作者は未詳。／藤原道長の栄華を中心に、文徳天皇から後一条天皇までの時代を紀伝体で描く

(27) 大宅世継（おほやけのよつぎ）と夏山繁樹（なつやまのしげき）という二人の老人が、雲林院の菩提講で昔を語り合い、そこに若侍が批評を加えるという対話（座談）形式。／「世継物語」とも呼ばれる。語り手がいるから敬語が複雑になる

(28) 大鏡→今鏡→水鏡→増鏡／「だい・こん・みず・ます」で覚える。※えがかれた時代の古い順は水鏡→大鏡→今鏡→増鏡なので混同しないこと

【現代語訳（全文）】

花山院の御代に、五月下旬の闇夜、五月雨の時期も過ぎて、たいそう恐ろしげにぎあざあと雨の降る夜、帝が、もの足りなくお思いになったのだろうか、殿上の間にお出ましになって、管弦の遊びをなさっていたところ、人々が、お話を申し上げなどなさって、昔恐ろしかったことなどを話題に申し上げるようになったときに、（帝が）「今夜はまったく気味の悪い夜であるようだ。これほど人が多い所でさえ、何かの気配が感じられる。まして、人けの離れた所などはどうであろうか。そのような所に一人で行けるだろうか、いや、行けまい。」とおっしゃったところ、（人々は）「とても参ることはできますまい。」とだけ申し上げなさったのに、入道殿（道長）は、「どこへなりときつと参りましょう。」と申し上げなさったので、そういう（人をけしかける）ところがおありになる帝なので、「たいそうおもしろいことだ。それならば行け。道隆は豊楽院、道兼は仁寿殿の塗籠、道長は大極殿へ行け。」とおっしゃったので、

〔中略〕また、（ご命令を）承りなさった殿方たちは、ご様子が変わって、困ったことだと思っていらっしゃるのに、入道殿は、少しもそのようなご様子もなく、「私の従者は連れて参りますまい。この陣の吉上でも滝口でもよい、一人を、『昭慶門まで送れ。』とご命令をお下してください。それより内へは一人で入りましょう。」と申し上げなさるので、（帝が）「（それでは行った）証拠がないではないか。」とおっしゃると、（道長は）「なるほど。」と言って、（帝の）御手箱に置いていらっしゃる小刀を頂戴して出発なさった。〔中略〕「子の四つ。」と時刻を奏上して、このようにご命令があり相談しているうちに、丑の刻にもなってしまったのだろうか。

中関白殿（道隆）は、陣のところまで（恐ろしさを）こらえていらっしゃったが、宴の松原のあたりで、何ともわからない声々が聞こえるので、どうしようもなくお帰りになる。粟田殿（道兼）は、露台の外まで、ぶるぶる震えながらいらっしゃったが、仁寿殿の東側の軒下の敷石のあたりに、軒と同じ高さの人がいるように見えなさったので、正気を失って、「命がございましてこそ、ご命令もお受けできましよう。」と言って、めいめい引き返して参上なさったので、（帝は）御扇をたたいてお笑いになるが、

入道殿は、たいそう長い間お見えにならないのを、どうしたのかとお思いになっているうちに、たいそう何気ない様子で、何事もなかったようなふうで、参上なさった。（帝が）「どうだった、どうだった。」とお尋ねになると、（道長は）たいそう落ち着いた様子で、御刀に、削り取ったものを添えて差し上げなさるので、（帝が）「これは何だ。」とおっしゃると、「手ぶらで帰参いたしました。証拠がございませんでしようから、高御座の南面の柱の根もとを削って参ったのでございます。」と平然と申し上げなさるので、（帝は）たいそう驚きあきれてお思いになる